

「DER KEIM」

本学外国語学研究所および地域研究研究所の院生のための雑誌「DER KEIM」が一九七七（昭和五十二）年に野村滋の指導の下、院生江原吉博が中心になって創刊された。野村の退官後は、平野篤司に引き継がれ、一度合併号もあるが、昨年、第二一号が発行された。院生の会費、先輩諸氏の寄付金、夏季セミナーでの収益金、執筆者の負担金などでまかなわれている。博士後期課程ができてからは、後期課程の学生も執筆するようになった。現在は成田節も加わり、質の向上に努めている。野村が在任中、野村の提供するワインなどを傾けながら行う、時には激論になったこともある合評会は楽しい思い出である。なお、収録された論文数は一一五本、研究ノート三本に及ぶ。六六年に設置され、歴史の浅い、「コネ」のない本学大学院の卒業生が就職の口を探すためには、論文を書く以外に道はなく、「DER KEIM」はそのための唯一の可能性と言えるものであった。「DER KEIM」での論文を通して、幾人もの学生が職を得ている。この点でも、野村の功績はきわめて大きいと言える。大学院が改組されるに当たり、本学の院生全体のための雑誌「言語文化」が創刊され、「DER KEIM」の廃刊も一時話題にのぼったが、ドイツ語関連のみの雑誌があることのメリットが大であるとの理由で、「DER KEIM」の存続が決まった。

六 学生の活動と進路

語 劇

一八九七（明治三十）年の創立以来、一九〇八（明治四十一）年から一九一九（大正八）年までの間と太平洋戦争を挟んだ一九三七（昭和十二）年から四六年の時期を除いて、ほとんど毎年、語劇大会（あるいは語劇祭）が開催さ



クライスト作「シュロップフェンシュタイン家」(昭和10年11月上演)

れてきた。ドイツ語の語劇の開催は、合計七五回に及んでいる。一九九七(平成九)年は残念ながらドイツ語科の語劇は行われなかった。

一九一九(大正八)年、語劇大会が一〇年ぶりに再開され、当時ウインクラ、ロエンの両ドイツ人教師が学生の演劇指導などを熱心に行った。ウインクラは演劇に明るく、演技を指導し、ロエンはドイツ語の話し方や正しい発音を指導した。

特別な意味合いを持つ語劇大会の一つは、一九二一(大正十)年の、ゲルマニア会主催「独逸学生義援語劇大会」であろう。ドイツ語科の出し物はホーフマンスタールの「痴人と死」。英、露、スペイン、支の各語科も賛助の形でシェークスピア「リチャード二世」などを演じてくれた。「生活に困窮しているドイツの学生たちにできるだけ多くの寄金を贈ろう」と、懸命に入場券を売り歩き、出納帳の帳尻は一、二七五円となり、ゲルマニア会代表がドイツ大使館を訪れ、全額を寄付した。もう一つの語劇は、一九四七(昭和二十二年)年に一年ぶりに開催された戦後初の語劇祭であろう。

これは「歴史的快挙」と言われるほどのものだった。全一二科が参加し、ドイツ科は「シユロツフェンシユタイン家の人々」を上演した。極めて思い出深い語劇祭になったようである。

なお、一九二五（大正十四）年に文部省が語劇での衣装や小道具の使用を禁じたため、金ボタンの制服で語劇を演じた。また、一九四〇（昭和十五）年の頃には、従来の語劇大会に代わり、「語学大会」が催されたこともある。

卒業生の進路

ドイツ語学科の卒業生の進路で特徴的なことは、大学での就職に就く率の高さである（伊藤暢章『ドイツ語科出身の教育者、学者、研究者たち』「未刊」参照）。一九三四（昭和九）年の『外語同窓会誌』再興四号「本科卒業生職業別」という資料によると、その時までのドイツ語部卒業生五七九名のうち、教育関係の職業に就いているのは七九名（一三・六パーセント）で、その内訳は、大学・高校・専門学校が六九名、陸海軍諸学校が三名、その他の学校が七名となっている。英語部の場合、卒業生九〇〇名のうち教職に就いているのは三四六名（三八・四パーセント）で、内訳は、大学・高校・専門学校が四七名、陸海軍諸学校が三名、師範学校が五名、中学校が一七一名、高等女学校が一八名、実業学校が八四名、その他の学校が一八名となっている。英語部卒業生で教職にある者の約八〇パーセントは師範学校、中学などの中等教育機関で教えているのに対して、ドイツ語部卒業生ではそれがゼロで、逆に、大学などの高等教育機関で教えているのは八七パーセントである（英語部では一三パーセント）。このように大学で就職に就くものが圧倒的なのである。明治期の卒業生の約三分の一は、高校、高専、大学あるいは陸海軍諸学校のドイツ語教員となっている（ただし、第四回卒業生あたりから、外国語学校卒業後、東京文科大学「東大文学部」独逸文学科、東京法科大学「東大法学部」、京都法科大学「京大法学部」などに進学する者が目立ってくる）。なお、仏語部の場合、

大学・高校・専門学校が三三名で、六二パーセントである。この背景には、一八九四（明治二十七）年の高等学校令によつて各地に設置された旧制高等学校でドイツ語の人氣が高く、ドイツ語が熱心に学ばれたこと、戦後の新制大学でも教養部にその伝統が引き継がれたことがある。新制大学に限って見ると、卒業生二、〇〇四名のうち約二六〇名（約一三パーセント）が大学で教職に就いており、昔の伝統は今も引き継がれていると言える。このことは大阪外国語大学についても言えるようである。

全体では、卒業生総数三、〇一八名中、大学などの教職に就いた者は四二五名（一四・一パーセント）で、そのうち男子は卒業生二、二六七名中三六六名（一六・一パーセント）、女子は七五一名中五九名（七・九パーセント）である。なお、女性の学者、研究者の先駆的役割を果たした卒業生として、特に一九五五（昭和三十）年卒の佐藤（千田）洋子、一九五七（昭和三十二）年卒の菊池（鈴木）雅子の名前を挙げるべきであろう（共にドイツ語研究者）。